研究所員の受賞

学　会　名：第18回和漢医薬学会大会・奨励賞（2001年8月18- 19日）

受賞課題名：和漢薬治療により良好に経過している糖尿病性腎症の3症例

漢方診断学部門　後　藤　博　三

研究内容：

糖尿病性腎症は，慢性の高血糖状態により引き起こされる細小血管障害の一つで，蛋白尿，腎機能障害，高血圧，浮腫などの徴候を呈し，最終的に腎不全に陥る。近年，糖尿病性腎症の透析導入患者が増加し，透析導入後の生命予後も悪く，早急な対策を要する疾患である。しかし，西洋医学的には血糖コントロール以外，有効な治療法がないのが現状である。今回，顕性蛋白尿を認め，糖尿病性腎症と診断された患者に和漢薬治療を施行し，長期間良好に経過している3症例を経験したので，若干の考察を加え報告する。

症例1は，74歳の男性で36年間の糖尿病罹患歴があった。富山医科薬科大学附属病院和漢診療部（以下当部）受診後98ヶ月の観察でS-Cr値は1.2から2.0mg/dl，BUN値は23から27mg/dlと経過し，血糖コントロールはインスリン製剤を使用し，HbA1c6.2から7.2%程度で経過し，手足の火照り等の症状も軽快した。症例2は，79歳の男性で30年間の糖尿病罹患歴があった。当部受診後70ヶ月の観察で，S-Cr値は0.9から1.9mg/dl，BUN値は23から24mg/dlと経過した。血糖コントロールは経口糖尿病薬を使用し，HbA1c6.5から11.0%の間で変動したが，浮腫や全身倦怠感などの症状も軽減した。症例3は，78歳の男性で26年間の糖尿病罹患歴があった。当部受診後81ヶ月の観察で，S-Cr値は1.1から2.9mg/dl，BUN値は22から49mg/dlと経過した。血糖コントロールは経口糖尿病薬からインスリン製剤に変更しHbA1c6.0から8.0%程度で経過し，全身倦怠感や下肢のしびれなどの症状も軽快した。

持続的に蛋白尿を認める顕性腎症期に至った糖尿病性腎症は，数年の経過で末期腎不全から血液透析に至ると言われている。進行防止のため，ACE阻害剤の有用性や蛋白制限食の重要性が報告されているが，十分なデータがないのが現状である。一方，和漢薬の慢性腎炎や慢性腎不全に対する有効性が近年報告されている。今回，3症例に用いた大黄ならびに温脾湯については，窒素代謝に対するanabolic, anticatabolic作用やメチルグアニジンの低下作用が報告されており，腎に対して保護的に働き，腎不全の進行を抑制する可能性が考えられる。今回の症例から和漢薬は，糖尿病性腎症における腎機能障害に対して進行抑制作用を有する可能性が示唆された。このことから，和漢薬は糖尿病に随伴する諸症状を緩和し，QOLを改善するのみでなく，糖尿病性腎症による血液透析導入までの期間を延長し，予後を改善したと考えられた。